

## シラーの憑依

小黒 康正

九州大学文学部には、他に類を見ない委員会がある。他部局の方、他大学の方、誰に聞いてもそんな委員会は無いと言う。これまで委員長が選出されたことも無ければ、委員会が開かれたこともほとんど無い。但し、哲学、歴史学、文学、人間科学の4コースから委員が1名ずつ選出されるやいなや、各委員が主体的に仕事に取りかかる。委員同士の役割分担を一応行うが、常に委員同士が助け合う。考えてみれば、理想の委員会活動かもしれない。その名は「文学部教員親睦委員会」、ひとは「レクリエーション委員会」と呼ぶ。

委員会の主たる業務は、教員親睦旅行の企画である。それは教員の積立金による旅行だ。阿蘇、雲仙、湯布院など、九州の代表的な観光地に行くこともあるが、いざさかマニアックな場所に行くことも少なくない。垂玉温泉の露天風呂、姫島の黒曜石、山鹿の康平寺、人吉の幽霊寺、軍艦島の廃墟、甌島のなまこ池、どれも実に忘れ難い。旅程には、日本酒であれ、焼酎であれ、酒蔵見学も欠かせない。毎回、参加教員が夜遅くまで清談のときを過ごす。

委員会ができた20年ほど前は二泊三日であったが、現在では一泊二日の旅行に落ち着いている。昨今ほどの教員も多忙を極めているので、当方が10年ほど前に提案した。一泊旅行の他に、日帰り旅行も行いましょう。そうすれば、お忙しい方も、女性教員も、外国人教員も、参加しやすくなるはずと。日帰りで行った先は、唐津（イカの活造り）、筑前大島（神の島）、糸島半島（カキ小屋）、八女（白壁の町並み）など。近場もなかなか悪くない。

教員親睦委員会は、新任教員の就任講義や懇親会も企画する。他ではこのような企画はほとんどないらしく、その意味で九大文学部は「古い」のかもしれない。とはいえ、就任講義は実に興味深く、意義深い。会場を見渡すと、学生よりも教員の方が多い。そして夕刻から行われる懇親会は、新任教員を囲んでたちまち「シンポジウム」と化す。こうした企画は、私見では、既に立派なFDである。その意味で、九大文学部は伝統的に「新しい」のかもしれない。

ところで、この委員会、意外とドイツ文学と関係が深い。現在、4人の委員中3人が准教授だが、本来は教授がなるものだった。この旧習を墨守するのが

文学コースで、初代委員が国文学の中野三敏教授（文化功労者）、そして独文学の池田紘一教授、浅井健二郎教授が歴任し、その後は当方が重責を担い、今では最も在職期間が長い。「小黒さんは不動の四番」、そう同僚に言われ続けているが、たかが親睦委員、されど親睦委員、責務も伝統もそれなりに重い。

そんな教員親睦委員会も決して順風満帆ではなかった。たしか5、6年前のことだったと思う。九大文学部では委員会の統廃合が進み、各委員長は委員会の活動を報告しなければならなかった。教員親睦委員会はおそらく真っ先に廃止対象になっていたと思う。それでいわば委員長の代りに最も委員歴が長い当方に問い合わせがきた。教員親睦委員会の活動内容ならびに存在意義は何かと。思い返すと、何だか自分の人生観を問われたような気がした。

教員親睦委員会の存在意義は何か。名称どおり親睦を深めながら、教員同士の意見交換の場を設け、FD活動や学際的な活動を促す為か。当時、そのようなことも考えたかもしれない。しかし、実際にはそう答えなかった。実はドイツ文学研究者としてこう書いた、「人間は遊ぶときのみ完全に人間である」、文学部の本質は「真剣なる遊び」、その意味で教員親睦委員会は文学部の理想を担うと。何だか取り憑かれたように書いた。もしかすると、あれはシラーの憑依だったのかもしれない。

どこの大学においても、人文学系教員の立場は厳しい。有用性の尺度のもとで改革が断行される度に、人文学系教員は憂き目に遇う。だからこそ、自らの首を自らの手で絞めてはならない。教員親睦委員会にこそ文学部の文学部たる所以がある。九大文学部において教員親睦委員会が必要とされないとき、それは九州大学において文学部が必要とされないときではないか。浮世離れした当方の答申は、執行部に意外とすんなりと認められた。やはり教員親睦委員会の活動実績がものを言ったと思う。

とはいえ、当方、今は別の危惧を抱く。「遊び」の本家がぐらついているからだ。当方が日本独文学会の理事会メンバーだった時、全国学会のあり方が問われ、特に懇親会については縮小や廃止の意見も出た。この議論を西日本支部幹事会で伝えたところ、複数の方々が言われた、「支部ではたとえ研究発表が無くても懇親会だけはきちんとやりましょう」と。九州にはシラーに取り憑かれている方がまだまだ少なくない。

（おぐろ やすまさ／九州大学教授）